ルーマニア王国における記憶をめぐる戦い

―「幻のカロル１世像」を中心に―

Struggles over Memories in Romanian Kingdom: The Case of Monument of Independence and Carol I

髙　草　木　　邦　人

本稿の目的は，「幻のカロル１世像」の来歴を追いながら，20 世紀初頭ルーマニアの二大政党政治による記憶の政治利用を明らかにするものである．当該時期の二大政党である自由党と保守党は，記念碑建立をめぐり，ある特定の記憶を強調することで，自らの立場を高める記念碑建立を提案していた．自由党は，1902 年のフェレキデ法案によって，1877-78 年のルーマニア独立戦争を顕彰する記念碑を首都ブカレストに建立することを提案した．なぜなら，独立戦争において自由党が活躍したという記憶が同時代人の間に存在していたからである．自由党は，この記憶を最大限利用しながら，記念碑建立の計画を自らの論理で進めていった．一方，保守党は国王であるカロル１世の記憶を利用することで，自由党に対抗した．1906 年にカロル１世即位 40 周年記念を大規模化する中で，保守党はトリアンダフィル法案を発議し，建立予定の記念碑に内包されていた自由党の記憶を薄めることに成功した．しかしながら，自由党と保守党にとって，この記念碑建立は，本質的に重要な事項ではなかった．両党は自らの政策を有利に進めるために，そして自らの権勢を高めるために，記念碑建立を発議したに過ぎなかったのである．それゆえ，「幻のカロル１世像」の建立計画は，政局の混乱と記念碑建立委員欠員の中で，頓挫してしまった．

Ⅰ．はじめに

ルーマニア王国[1]時代において，初代国王カロル１世[2]の銅像は３体建立された．そのうち，最も有名なものは，首都ブカレストにおいて 1939 年に建立されたカロル１世の騎馬像[3]である．二つ目は，

1) 1859 年にワラキア公国とモルドヴァ公国との合同により誕生したモルドヴァ・ワラキア合同公国は，1866 年７月に新憲法を制定し，ルーマニアと国名を改称した．なお，その後，ルーマニアは 1877 年に宗主国のオスマン帝国に対して独立宣言をおこない，1881 年に王国として国際的に承認された．

2) プロイセン王家の縁戚であるホーエンツォレルン＝ジグマリン候カール・アントンの次男として 1839 年４月８日に生まれた．彼は 1866 年５月 10 日にルーマニア公国の公として選出され，1881 年にはルーマニアの王国化に伴い，ルーマニア初代国王に即位した．カロル１世は 1914 年９月 27 日に死去したが，その治世は約 48 年にわたった．なお，本稿で言及する人物の経歴などについては，以下の文献を参考にした．Stan Stoica et. al, ***Dicționar biografic de istorie a României***, Editura Meronia, 2008.

3) このカロル１世の騎馬像は，ルーマニア共産党によって 1948 年に破壊された．Şerban Caloianu şi Paul Filip, ***Monumente Bucureştene***, Monitorul oficial, 2009, p.80. 共産主義体制の崩壊後，この騎馬像の再建が試みられ，2010 年に再建の除幕式がおこなわれた．https://www.antena3.ro/actualitate/statuia-lui-carol-i-inaugurata-in-piata-palatului-regal-in-prezenta-familiei-regale-114590.html（2021 年６月６日最終閲覧）

地方都市シナイアにある離宮のペレシュ城において 1933 年に建立されたカロル 1 世像[4] である．三つ目は，南西の地方都市クラヨヴァに 1913 年に建立された「クラヨヴァの独立記念碑」[5] である．そして，この三つのカロル 1 世像の他に，もう一つ，ブカレストに建立される予定であった「幻のカロル 1 世像」というものがある．

しかし，この「幻のカロル 1 世像」は，これまでの研究においてほとんど言及されてこなかった．例えば，近年のカロル 1 世の伝記研究の中においても，「幻のカロル 1 世像」については，まったく述べられていない[6]．また，当該時期のルーマニアに建立された銅像や記念碑を二大政党政治の文脈で研究したブラテスクも，「幻のカロル 1 世像」については，その対象としていない[7]．そして，1877 年から 1878 年のルーマニア独立戦争（以下，独立戦争と略記）[8] 以後に，ルーマニアの全土に建てられた独立戦争記念碑を分析したボンツェアヌは，「幻のカロル 1 世像」に言及しているが，彼女は「幻のカロル 1 世像」と「クラヨヴァの独立記念碑」とを同一視している[9]．また，ボンツェアヌがその論拠としているタナソイウのカロル 1 世に関する研究も，この二つを同一視している[10]．しかし，後述するように，「幻のカロル 1 世の銅像」と「クラヨヴァの独立記念碑」は，建立地や建立委員会などが異なり，同一のものとしてみなすことはできない．

一方，「クラヨヴァの独立記念碑」については，一定の研究蓄積がある．まず，ベルチャ＝フロリャらの研究[11] は，地方文書館の史料も駆使しながら，1909 年の建立計画から，共産党独裁体制下における 1948 年の破壊までを詳細に紹介している．また，「クラヨヴァの独立記念碑」の造形の設計者であるパヴェレスク＝ディモ（D. Pavelescu Dimo）についても，幾つかの研究論文がある[12]．しかし，これら「クラヨヴァの独立記念碑」に関する研究においては，「幻のカロル 1 世像」に関する言及は全くない．つまり，研究史の点からも，「幻のカロル 1 世像」と「クラヨヴァの独立記念碑」は異なるものといえるのである．

以上の研究状況を踏まえて，本稿では，二つの目的を持ちながら，この「幻のカロル 1 世像」を検討する．目的の一つ目は，「幻のカロル 1 世像」の来歴である．「幻のカロル 1 世像」の建立は実現しなかっ

4）　このカロル 1 世像は，共産主義体制のもとで唯一破壊されず，現存している．Ion Mamina, ***Regalitatea în România 1866-1947***, compania, Bucureşti, 2004, p.201.

5）　この「クラヨヴァの独立記念碑」はルーマニア共産党によって 1948 年に破壊され，現存してない．

6）　例えば，Ion Bulei, ***Viața în vremea lui Carol I***, Tritonic, Bucureşti, 2005 ; Sorin Critescu,***Carol I şi politica României (1878-1912)***, Paideia Bucureşti, 2007; Sorin Liviu Damean, ***Carol I al România. Un monarh devotat***, Editura Cetatea de Scaun, Târgovişte, 2015; Ioan Scurtu, ***Istoria românilor în timpul celor patru regi (1866-1947)***, vol. I. Carol I, Editura Enciclopedică, Bucureşti, 2001.

7）　Liviu Brătescu, ***Liberali versus conservatori. Monumente publice şi memorii concurente în România modernă (1866-1914)***, Editura universităţii Alexandru Ioan Cuza, Iaşi, 2015.

8）　一般的には，露土戦争と呼ばれる戦争であるが，ルーマニア史ではこの戦争を独立戦争と呼ぶ．

9）　Teodora Bonţeanu, Cultul eroilor militari reflectat în monumentele războiului de independenţa din regatul României 1877-1918, ***Revista Bistriței***, XXII, 2008, pp.339-347.

10）　Carmen Tănăsoiu, ***Iconografia regelui Carol I. De la realitate la mit***, Editura Amarcord, Timişoara, 1999.

11）　Georgică Bercea-Florea şi Georgeta Bercea-Florea, ***Drama unui Monument istoric***, Editura Arves, 2005.

12）　例えば，Rusalia Crăciunoiu, Lucrări de grafică inediteale lui Dimitrie Pavelescu-Dimo, ***Țara Bârsei***, nr. 12, 2013, pp. 429-434 ; Paul Rezeanu, Sculporul D. Pavelescu-Dimo, ***Stuida Universitatis Babes-Bolyai. Historia***, 3 ,1997, pp.99-116.

たが，そもそもどのような理由で建立が計画されたのか，そしてその計画はどのように進められたのか．本稿では，これらの点を中心に検討して，従来の研究ではほとんど無視された「幻のカロル 1 世像」の経緯について明らかにしていく．そして，本稿の目的の二つ目は，この「幻のカロル 1 世像」をめぐる論争において，過去の記憶が政治利用された過程を明らかにすることである．20 世紀初頭のルーマニアでは，自由党（Partidul Nţional-Liberal）と保守党（Partidul Conservator）による二大政党政治がおこなわれていた．両党は理念や政策面など様々な点で対立していたが，その議論において両党は政敵の失策や失態を批判するだけでなく，過去の記憶を想起しながら，政敵に攻撃を与えていた．つまり，ある特定の記憶に対する強調や省略により，自らの政策や理念の実現を有利に進めていたのであった．このような記憶をめぐる戦いを理解するために，本稿では，「幻のカロル 1 世像」の建立をめぐる論争を事例として，記憶の政治利用の方法と特徴を明らかにしていく．そして，この二つの目的に達することで，20 世紀初頭のルーマニアの二大政党政治に対する新たな視点を提示してきたい．

さて，本稿では，当該時期の二大政党である自由党と保守党の論争を検討するために，主な材料として，『下院議事録』（*Dezbaterile adunării deputaților*，以下 *D. A. D.* と略記），および『上院議事録』（*Desbaterile Senatului*，以下 *D. S.* と略記）を利用する．この二つの議事録から，「幻のカロル 1 世像」に関する法案の発議，法案の内容，審議過程，採決などを詳細に検討していく．また，議会における議論を補足する史料として，自由党機関紙『国民の意志』（*Voința națională*）と左派系の新聞『真実』（*Adevărul* ）を利用する[13]．『国民の意志』を利用することで，議会の議論では述べられなかった自由党の主張や見解などを確認していく．一方，『真実』は当該時期において最も多い発行部数を誇った新聞の一つであった．それゆえ，世論の動向を確認する一つの手段として『真実』の記事を利用していく．さらに，この二紙の他に，右派系の新聞『世界』（*Universul*）や地方新聞『オルテニアの使い』（*Curierul olteniei*）などの記事も適時取り上げていく．

Ⅱ．ブカレストの独立記念碑の建立計画

1．自由党議員フェレキデの発議

「幻のカロル 1 世像」の建立計画の発端は，1902 年の下院において自由党古参党員フェレキデ（Mihail Pherekyde）が発議した法案（以後，フェレキデ法案と表記）に遡ることができる．そこで，本章では，フェレキデ法案の内容を分析しながら，自由党が記憶をどのように政治利用したかを明らかにしていく．

1902 年 11 月 15 日[14] から開会された下院では，議事日程通りに進行し，国王演説返答案に関する議

13） 新型コロナウィルス（COVID-19）の世界的な感染拡大のために，ルーマニアへの渡航が現在難しい状況であり，本稿では，デジタル・アーカイヴ化されている史料を主に使用した．本稿が中心的に利用した『国民の意志』と『真実』は，ブカレスト・デジタル図書館において，その大部分がデジタル・アーカイヴ化されている．なお，同図書館の URL は http://www.digibuc.ro/（2021 年 6 月 3 日最終閲覧）である．

14） 当該時期のルーマニアではユリウス暦が採用されていたため，本稿ではユリウス暦で日付を記載する．なお，20 世紀では，ユリウス暦に 13 日を加えるとグレゴリオ暦になる．

論へと進んでいた[15]．しかし，11月28日の下院の本議会において，下院議長フェレキデが，議事日程にない法案を緊急提案し，さらに，自身が下院議長にも拘わらず，法案の即時採決を求めるような行為に及んだ[16]．本議会で発議された法案は，通常の場合，分散会[17]にまわされる．分散会での議論は代表委員会で取りまとめられ，その後に本会議で審議されることになっていた[18]．しかし，フェレキデは「時間の節約」という理由で，分散会における法案の議論を割愛し，各分散会議長から構成される代表委員会選出を提案した[19]．この提案は，フェレキデ法案が発議された11月28日中に採決されることを意味した．そして，この提案が下院で承認されただけでなく，フェレキデ法案は代表委員会の会議において修正を受けることなく，フェレキデ自身が提案した原案のまま，本議会で審議され，下院において全会一致で可決された[20]．

さて，このような形で可決されたフェレキデ法案はどのようなものであったのか．まずは，発議された際のフェレキデの演説を簡単に要約しながら，確認しておこう．フェレキデが発議した法案は，独立戦争とそれに従軍したルーマニア軍を顕彰する記念碑の建立を提案したものであった．フェレキデによると，独立以前のルーマニアは「従属的で，無視され続けた」国であり，そして，戦争に参加した軍隊がまだ創設したばかりで，戦闘経験のない，不十分な軍隊であった．それにもかかわらず，この軍隊の英雄的行為や犠牲，さらに君主カロル1世と当時の政治家たちの奇跡的な活躍によって，ルーマニア軍は独立戦争に勝利した．この勝利により，ルーマニアは独立を勝ち取っただけでなく，ルーマニアは国際的にもヨーロッパ諸国の一員として評価されるようになった．このことから，フェレキデは，「皆様方，軍隊は，国全体とともに，本日，プレヴナ陥落[21]の25周年を祝っています．順番で言えば，国民の代表者である私たちが，現在の栄誉と成果をもたらした軍隊を祝うことは当然のことでしょう」と述

15）なお，当該時期のルーマニアの議会には，上院と下院があり，これらの常会は11月15日から約三か月間とされた．議会開会の初日には，国王演説（政府の事実上の所信声明）が読みあげられ，翌日以降，同会期における議長などの役職の選出，各委員会の選出，そしてくじ引きによる分散会の組み分けがおこなわれる．このように，議事に必要な役割分担が決められた後，国王演説に対する返答案が審議される．この返答案の採決が，政府の所信声明に対する事実上の承認となり，当該会期において審議する法案や予算の大枠を決めるというものであった．Ion Mamina, ***Monarhia constituțională în România. Enciclopedie politică***, 1866-1938, Editura Enciclopedică, Bucureşti, 2000, pp.69-73.

16）フェレキデが法案を発議し，演説をしている間，議事進行は副議長シェンドゥレア（St. Şendrea）が務めた．***D. A. D.***, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, pp.41-42. なお，下院の速記録には記載がないが，『真実』紙に掲載された下院の議事要約には，フィレキデが議長席から降り，副議長シェンドゥレアに議長席を譲った様子が掲載されている．O şedinţa naţională, ***Adevărul***, an. 15, nr. 4792, 30 noiembrie 1902, p.1.

17）ルーマニア語では secţiuni と称する．全議員をくじ引きでグループ分けしたもので，下院には7つ，上院には5つ設置された．本会議で発議された法案などは，本議会で審議・採決される前に，各分散会で議論された．

18）通常の法案の審議については，基本的には，国王演説返答案の採決後におこなわれるが，緊急に発議され，承認された法案については，国王演説返答案の採決前にも審議することができた．発議された法案は，通常の場合，まず分散会に提出され，議論される．各分散会では，当該法案に関する議論がまとめられ，代表者が選出される．各分散会の代表者は一堂に会して代表委員会を開き，各分散会で出された多数派や少数派の意見を踏まえ，場合によっては修正案も検討される．この代表委員会で作成された報告書と法案が本議会で読みあげられ，法案が最終的に採決されることになっていた．Mamina, ***Monarhia constituțională…***, pp.69-73.

19）***D. A. D.***, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, pp.41-42.

20）***Ibid.***, p.48.

21）ブルガリアの北部の都市で，露土戦争において重要な局面の戦いがおこなわれた．

べ[22]，「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑を首都に建立する．1901 年から 1902 年までの剰余金のうち，50 万レイの額をこの事業に振り分ける．」という内容の法案を提出したのであった[23]．

以上のようなフェレキデの演説内容はナショナリズム的であったということは言うまでもないが，本稿で注目したい点は，以下の二つである．一つ目の注目点は，フェレキデがこの独立戦争の同時代人であり，当事者であったという点である．1842 年生まれのフェレキデが政治の世界に入ったのは 1875 年であった．また，彼が所属する自由党は，公式的には，1875 年に結成され，フェレキデもその結党にかかわった人物であった．そして，フェレキデの政治キャリア[24]がはじまった 2 年後に，独立戦争が勃発したのである．それゆえ，フェレキデは演説の中で，独立戦争開始の記憶を次のように想起している．

「その瞬間は非常に重苦しく，厳粛でありました．カロル公が軍隊の先頭にたち，ドナウ川を渡ったときに，すべての人々の心にどれほどの心配がのしかかったかを，老いた者たちは思い出すでしょう．皆が待ちわび，自問自答しました．この酷い戦争で軍隊の運命はどうなるのかと．軍隊は若く，過去の伝統は過去の闇に覆われ，軍隊には戦争の経験がなかったです．」[25]

このように，フェレキデは，法案の発議の際に，独立戦争に関する自らの体験や記憶を織り交ぜながら語っていたのである．

フェレキデの演説における二つ目の注目点は，独立戦争の記憶が，自由党に引き寄せながら語られているということである．特に，フィレキデは独立戦争時において自由党を代表する人物たちがいかに活躍したのかを述べている．例えば，当時の政府首相であった自由党初代党首ブラティアヌ（Ion C. Brătianu）の記憶は以下のように語られた．

「軍隊が不足していなかどうかを確認するために，馬車で旅団から旅団へと駆け抜けていたブラティアヌに，国民全体の心は付き添っていました．一方で，ブラティアヌがさらなる犠牲を要求するために戻ってきたとき，国全体が一つに集まり，必要なものを全て提供したのです！さらに，奇跡がおこったのです．つまり，私たちの若い軍隊は，戦争を知らなかったにも拘わらず，必要なものを事前に準備していなかったにも拘わらず，十分な装備をもつ熟練の軍隊のように，戦ったのです．この奇跡に，国民全体の犠牲と献身が結び付いたのです．（長い拍手，拍手の繰り返し）」[26]

また，フェレキデは，当時の下院議長であった自由党幹部ロセッティ（C. A. Rosetti）と凱旋した国王との邂逅を引き合いに出しながら，独立戦争の記憶を以下のように想起した．

「国民の代表に会うために，戦場からあそこに，（上を指しながら）あの演壇にやってきた君主を，プレヴナにおける栄光ある勝利した司令官[27]を，ロセッティが議長席から迎えたときのことを思い出すと，

22） *D. A. D.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, p.41.
23） *Ibid.*, pp.41-42.
24） フィレキデは，1876 年 6 月の総選挙において下院議員に当選し，また同年 4 月には司法大臣に就任した（ただし，7 月まで）．以後，議員職と大臣職を歴任し，1901 年 3 月からは下院議長も歴任していった．
25） *D. A. D.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, p.41.
26） *Ibid.*, pp.41-42. なお，引用文のなかの括弧は，原文に記載されたものである．
27） 独立戦争に従軍したカロル 1 世を意味する．

私は激しい感情を抱き，そして忘れることはできません.」[28)]

さらに，独立戦争直前まで自由党政府の陸軍大臣に就任し，そして戦争時には作戦司令官に就任したチェルナト将軍（Al. Cernat）について，フェレキデはフランスのルコワント将軍との個人的なエピソードを紹介しながら，独立戦争におけるチェルナト将軍の軍事的名声がフランスにも轟いたことを，以下のように語るのであった.

「チェルナト将軍はプレヴナの前線におけるルーマニア軍の司令官であったと私が話すと，その時，ルコワンテ将軍の動きと態度は，真の軍人たちがこの戦争とチェルナト将軍が率いた軍隊を称賛しているということに気づかせてくれました．ルコワント将軍はチェルナト将軍に向き，称賛をもって彼を見つめました．あたかも通行人が過去の記念碑を見つめるように.（長い拍手）」[29)]

以上のように，フェレキデは法案を発議した際に，戦争の当事者として当時の記憶を想起する中で，その記憶を自由党員の活躍に結び付けていたのであった．もちろん，彼はその演説において，ルーマニア軍への称賛や国王に対する敬意を示しながら，記念碑の建立を提案している．しかし，同時に，記憶の重要な場面において（例えば，軍への補給，凱旋，国際的な評価など），自由党員の活躍や存在が雄弁に語られるのであった．このように，独立戦争を語る際に自由党の活躍が強調される傾向は，ある意味，当然の結果ともいえる．というのも，独立戦争の時期，自由党は政府与党であり，また議会の多数派でもあったからである．それゆえ，独立戦争は自由党政府の外交政策の帰結でもあり，戦争において自由党の活躍が目立つのは自然の成り行きともいえる．とはいえ，フェレキデ法案に対する下院の審議は，事実上，フェレキデの演説で終了している[30)]．そこで，この自由党の活躍が語られやすい傾向を確認するために，次節では，上院での自由党議員の発言などを検討していく.

2. 独立戦争における「自由党の記憶」

下院で可決したフェレキデ法案は上院においても 1902 年 12 月 2 日に審議されたが，その過程や自由党議員の演説は，下院におけるそれと類似するものであった．政府首相兼自由党党首のストゥルザ（Dimitrie A. Sturdza）はフェレキデ法案の審議を上院に提案したが，当初，自由党の幹部で，上院議長のアウレリアン（Petre S. Aurelian）は同法案を分散会で議論することを提案した．しかし，フェレキデ法案の早期可決を望む声が発せられる中で，自由党議員ドゥジュヴァラ（T. G. Djuvara）が，下院でおこなわれたように，上院においても分散会を省略し，各分散会議長からなる代表委員会の組織を提案した．そればかりか，ドゥジュヴァラは議長が欠席している分散会では副議長がその任にあたることを提案し，フェレキデ法案を同日中に可決させる意欲を示した[31)].

このドゥジュヴァラの提案は承認され，上院は停会し，フェレキデ法案を検討するための代表委員会

28) *D. A. D.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, pp.41-42

29) *Ibid.*, p.41.

30) 厳密にいうと，首相ストゥルザと代表委員会報告者のミシル（B. Missir）が，フェレキデ法案に対して若干の発言をおこなっている．*D. A. D.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, pp.42, 48.

31) *D. S.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 2 decembrie 1902, p.53.

の会議がおこなわれた．この代表委員会の会議に費やされた時間は，上院の速記録には明記されていないが，恐らく，数分のことであったと思われる．というのも，上院議長が停会の提案をおこなう際に「数分ほど停会する」と表現している点，そして代表委員会報告者ブディシュテアヌ将軍（C. Budişteanu）が本議会で提示した報告では，フェレキデ法案は原案のままであったからだ[32]．このように，上院においても，フェレキデ法案は，分散会を省略することで，発議された当日中に，原案のまま，全会一致で可決されることになった[33]．

フェレキデ法案は，審議の手続きに関して下院と上院では，同じような展開となった訳だが，類似点はこればかりではない．前節でみたフェレキデの演説の2つの特徴が上院においてもみられた．つまり，独立戦争の当事者が演説したこと，そして自由党の記憶が積極的に盛り込まれたことである．上院においては，自由党の立場から首相ストゥルザ（1833年生），上院議長アウレリアン（1833年生），代表委員会報告者ブディシュテアヌ将軍（1838年生），グラディシュテアヌ（Petre Grădişteanu，1839年生），そして，保守党の立場からラホヴァリ将軍（Iacob N. Lahovari，1846年生）とマヌ将軍（G. Manu，1833年生），以上の6名がフェレキデ法案に対して演説した．この6名のうち，ラホヴァリ将軍はフェレキデと同じく1840年代の生まれだが，残りの5名は1830年代生まれであった．つまり，フェレキデ法案に対して発言した議員たちは，独立戦争の同時代人たちであったのだ．さらに，発言者のうち，ストゥルザは自由党結党にかかわり，独立戦争前後に大臣職に就任した古参の自由党員で，アウレリアンは独立戦争時に公共事業大臣であった．また，ブディシュテアヌ将軍，ラホヴァリ将軍，マヌ将軍の3名は独立戦争中に軍役に就いていた．これらの点からも，フェレキデ法案をめぐる議論において当事者の記憶が重要であったことがうかがえる．

さて，上院の6名の発言者のうち，2名の保守党上院議員の発言は次章で検討するが，本節では，フェレキデ法案に対する演説において，個人的な体験談や自由党の記憶を積極的に盛り込んだブディシュテアヌ将軍とアウレリアンの2名の発言を検討しよう[34]．まずは，独立戦争に従軍したブディシュテアヌ将軍の発言からみていこう．ブディシュテアヌ将軍は，代表委員会報告者として，フェレキデ法案を本議会に提示したが，その報告の直後に，独立戦争に従軍した者として発言したい旨を述べた．彼は軍人という立場から，独立戦争の記念碑建立を決定した議員たちに感謝の念を示したうえで，以下のように述べ，その発言を締めくくった．

「しかし，上院議員の皆様方，君主カロルに敬意を示さなければ，この時代を語ることはできないのです．カロル陛下は，ルーマニアの独立のために幾世紀も戦った君主たちの後継者に値するのです．（長い拍手）陛下は，国と兵士の献身を信じて，国の独立を決定的な方法で獲得するためにドナウ川の向こうに軍隊を引き連れることに躊躇しなかったのです．（拍手）同じように，皆様方，不滅の輝かしいヨン・

32) *Ibid.*, p.53.
33) *Ibid.*, p.55.
34) なお，グラディシュティアヌの演説の要旨は，記念碑の建立費用増額を要求するものであった．また，ストゥルザは政府がフェレキデ法案に全面的に協力すること，そして記念碑の造形に関する提案を述べた．なお，記念碑の造形については，次章で言及する．*D. S.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 2 decembrie 1902, p.54.

ブラティアヌにも，さらに敬意を示す必要があります．私たちは思い出すのですが，彼が，彼だけが，不十分な準備状態の野戦を，その優れた知性によって，その意志の力によって，全ての者に吹き込む愛情によって，輝かしい最後へと導くことができたのです．これが永遠の記憶でありますように．（長い拍手の繰り返し）」[35]

このように，ブディシュテアヌ将軍は，独立戦争に従軍したカロル 1 世の功績を称える一方で，同時に自由党初代党首ブラティアヌの活躍についても称賛したのであった．そして，「彼だけが」という言葉が象徴するように，独立戦争において，ブラティアヌの存在が不可欠であったことが強調された．

独立戦争を想起する際に，自由党の活躍，特にブラティアヌの活躍を強調する傾向は，上院議長アウレリアンの発言にもみられた．例えば，アウレリアンはブラティアヌに「不滅の」や「偉大な」といった形容詞をそえながら，彼の活躍を語っている．そして，フェレキデやブディシュテアヌ将軍と同じように，アウレリアンも，カロル 1 世や軍隊と対置させながら，ブラティアヌの名を引用しているのである．例えば，以下のようなものが挙げられる．

「戦争の時，私は大臣としてコラビア[36]で，ブルガリアの地へ軍隊が渡河するという，素晴らしい光景を見る機会がありました．輝かしく偉大な司令官[37]とブルガリアの地までお供するという得難い機会にあずかりました．戦争のときには，軍隊の境遇に常に懸念を示す偉大なブラティアヌをみる機会がありました．（拍手）…今日の国を見たとき，私たちは聖なる義務をおこなっています．つまり，その開かれた心をもって，陛下と軍隊の勇気に敬意を示すのです．さらに，偉大なルーマニア人であるヨン・ブラティアヌに永遠なる称賛を与えるべきでしょう．彼は，ルーマニア民族の全ての苦しみと願望を，その中で体現したのです．（拍手）」[38]

以上のように，自由党議員たちは，当事者として独立戦争の記憶を語りながら，自由党の活躍に言及する傾向があった．もちろん，このような発言や行為は，自由党議員による自画自賛に過ぎないという評価もあり得よう．また，記憶であるために，その発言の中には，誇張や美化，忘却や記憶違い，そして虚偽もあるかもしれない．しかし，本稿では，視点を変えて，「独立戦争の記憶」の構造に注目したい．というのも，「独立戦争の記憶」を想起する際に，連想しやすい記憶が三つに大きく分けられるからである．「独立戦争の記憶」には，戦争の記憶であるために，当然のことながら，①兵士や将校らが活躍した記憶（以下，「軍隊の記憶」と表記），そして②最高司令官としてカロル 1 世が従軍した記憶（以下，「カロル 1 世の記憶」と表記）が含まれていた．しかし，この二つの記憶の他に，三つ目の要素が存在した．それが，③独立戦争で自由党が活躍した記憶（以下，「自由党の記憶」と表記）である．

上述したように，自由党は，1875 年に自由諸派が結集して結党した．そして，初代党首ブラティアヌの強力なリーダーシップのもとで，自由党は 1876 年から 1888 年まで政権の座に就き，この期間にお

35）*Ibid*., p.53.

36）ドナウ川沿いにある都市で，その対岸が「ブルガリアの地」であった．なお，この「ブルガリアの地」は，当該時期においては，オスマン帝国領であった．

37）独立戦争に従軍したカロル 1 世を意味する．

38）*D. S*., sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 2 decembrie 1902, p.54.

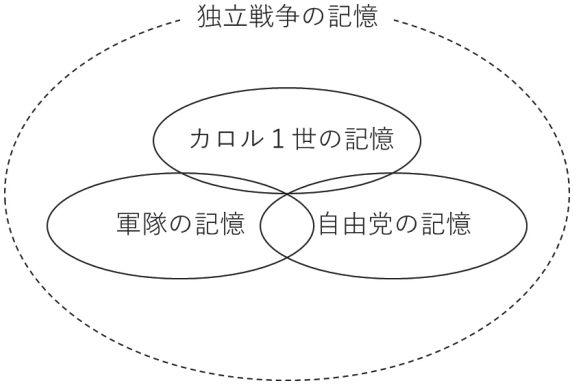

図１ 「独立戦争の記念」の構造

いて，自由党は常に議会の多数派を形成していた．この自由党の初めての大きな仕事が独立戦争だったのである．露土戦争（1877 年 4 月 12 日）がはじまると，自由党政府は，オスマン帝国への宣戦布告（1877 年 4 月 21 日）や独立宣言（同年 5 月 9 日）など，独立に向けた外交政策を展開した．そして，露土戦争の講和条約であるサン・シュテファノ条約の締結（1877 年 2 月 19 日）によって，自由党政府は，ルーマニアの独立を獲得したのであった．つまり，独立戦争は自由党が始め，終わらせた戦争なのである．さらに，総司令官カロル 1 世のもとで，ルーマニア軍を実際に指揮した作戦司令官は，自由党のチェルナト将軍であった．このように，「独立戦争の記憶」は，英雄的行為により勝利する「軍隊の記憶」，司令官として軍を率いる「カロル 1 世の記憶」，そして勝利に多大に貢献した「自由党の記憶」という三つの要素から構成され，さらにこの三つの記憶は，自由党議員の発言でもみられたように，重なり合うこともあったのである（表 1 参照）．それゆえに，「独立戦争の記憶」を想起すること自体が，「自由党の記憶」を呼び覚ますという効果があったのだ．

Ⅲ．保守党と「独立戦争の記憶」

1.「近い過去」からの批判

さて，「独立戦争の記憶」は「自由党の記憶」を含むがゆえに，独立戦争を称揚することは，同時に自由党を称揚することにつながった．後述するように，そこに保守党が付け込む余地はほとんどなかった．自由党もこのことを十分に理解していたと思われる．それは，フェレキデ法案の発議の際に，議会の多数派である自由党は分散会における議論を省略し，細かい議論をせずに，早々に決議させたことからもうかがえる．このような自由党の態度は，保守党からみれば，独立の達成という，ルーマニアの歴史において決定的な記憶を，あたかも自由党が独占しているようにみえたであろう．それゆえに，両院の保守党議員たちは，フェレキデ法案に対して賛意を示す一方で，独立戦争に関するこの「自由党による記憶の独占」状態に牽制をおこなうのであった．つまり，彼らは，「独立戦争の記憶」に含まれた「自

由党の記憶」を様々な方法で，希釈しようと試みたのであった．そこで，本章では，両院における保守党議員の演説を分析することで，「独立戦争の記憶」をめぐる対立をみていこう．

まず，下院における保守党の発言では，上述したように，下院におけるフェレキデ法案に関する議論の大部分がフェレキデの演説で占めていたが，保守党の下院議員は直接的に，この議論に参加しなかった．さらに言えば，フェレキデ法案が審議された 11 月 28 日の本会議に，保守党からは 1 名しか出席していなかった[39]．ただし，フェレキデ法案が代表委員会で検討されている間に，国王演説返答に関する議論が再開されるのだが，その際に，保守党で唯一出席していた下院議員ヴラデスク（M. Vlădescu）がフェレキデ法案を意識したと思われる発言をおこなった．ヴラデスクは演説を開始するにあたって，フェレキデ法案そのものに対しては，「皆様方，下院議長が少し前に述べられたように，独立戦争はルーマニア人の国家の存在と発展において最も重要で，決定的な瞬間でありました．私は，保守党の名の下に，独立戦争記念碑の建立のために下院議長殿がなされた発議に協力いたします．」と述べ，賛意を示した．しかし，つづく発言の中で，彼は「独立戦争が民族再生の初めての瞬間」ではなく，独立の達成は以前からの多くの人々の努力と犠牲の結果であったと主張し[40]，「独立戦争の記憶」を相対化した．さらに，彼は独立の達成に貢献した人々とその運動を以下のように特徴づけた．

「彼らは，自らの利益にも，そしてその政治的継承者の利益にも関心がありませんでした．というのも，政党政治はまだ存在しておりませんでした．それゆえ，彼らはむしろ民族の強化の明確な利益によって導かれたのです．これが，自らの生命を賭して彼らが戦った唯一の動機なのです．」[41]

このように，ヴラデスクは，独立にいたる過程の努力や犠牲は，一部の政治勢力に属するものではなく，政治的党派を超えたものであったと主張した[42]．つまり，彼は，「自由党の記憶」以外の要素を「独立戦争の記憶」に混入することで，「自由党による記憶の独占」に対して牽制を試みたのであった．

このようなヴラデスクの態度は，国王演説返答をめぐる議論や前年度の財政改善に対する評価にもみられた．彼は，国王演説返答が「共通事項であり，国全体が一致を見出すこと」という前提を主張し，保守党の意見を踏まえて，検討することを訴えた[43]．そして，ヴラデスクは，自由党が前年度の財政改善をあたかも自分たちの手柄のように主張してることを，批判した．彼によれば，財政が健全化したのは，それ以前の保守党政権[44]が必要な税制を整えたからだと述べた．その上で，ヴラデスクは以下のように述べた．

39）1901 年の総選挙で，保守党は，分派も含めて，下院（議席数 183）で 5 議席，上院（議席数 112）で 6 議席しか獲得できなかった．Mamina, ***Monarhia constituțională…***, p.239. ただし，1902 年までの欠員や補選のため，上記の議席数は若干変わる．なお，当該時期のルーマニアでは，二大政党の一方であろうと，野党は数議席しか獲得できない政治構造であった．詳しくは，以下の文献を参照せよ．拙稿「二十世紀初頭のルーマニアにおける選挙権改革－国民自由党と単一選挙部会案」『東欧史研究』28, 2006 年, pp.65-90.

40）***D. A. D.***, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, p.42.

41）***Ibid.***, p.42.

42）***Ibid.***, p.42.

43）***D. A. D.***, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, p.43.

44）1899 年 4 月から 1901 年 2 月までは保守党系の政権であった．1902 年 2 月からは，ストゥルザが首相に任命され，自由党政権が誕生した（1904 年 12 月まで）．

「当時，保守党は予算を供給する税金を作りだし，その後，自由党が必要な緊縮をおこない，金融状態を改善したのです．この二つの動きのおかげで，均衡予算になったのです…皆様方，保守党がもしまだ政権の座にあり，もう一度予算を作成する機会があったならば，保守党は財政改善のための措置をおこなっていたでしょう．」[45]

この発言は，もちろん，財政に対するものであり，独立戦争やフェレキデ法案に直接関係のあるものではない．しかし，ヴラデスクがその演説の冒頭で，「独立戦争の記憶」を相対化し，そして「自由党による記憶の独占」に対して牽制していたこと，さらに，ヴラデスクの演説がフェレキデの演説の直後におこなわれたこと，これらの文脈を踏まえると，ヴラデスクはフェレキデ法案の議論に間接的に参加していたといえる．つまり，1865 年生まれのヴラデスクは，独立戦争の当事者ではないために，「遠い過去」（独立戦争）ではなく，「近い過去」（財政問題）を語りながら，「手柄を独り占めする」ような自由党を批判したのであった．

2. 保守党の「弱い」記憶

下院でヴラデスクという若い保守党議員が奮闘していた一方で，上院においては，二名の保守党議員がフェレキデ法案に対して発言をおこなった．上述したように，この二名とはラホヴァリ将軍とマヌ将軍であり，彼らは独立戦争の当事者であるばかりか，軍人として従軍もしていた．それゆえに，彼らは，ヴラデスクと異なり，フェレキデ法案に対して直接的に自らの意見を述べている．しかし，その歯切れは悪い．ラホヴァリ将軍とマヌ将軍は，自由党のフェレキデやアウレリアンのように，独立戦争の記憶を雄弁に語ることはできなかった．例えば，ラホヴァリ将軍は，「独立戦争の記憶」を以下のように語った．

「そのとき，国内の対立に関係なく，保守党において，ある若手党員が熱狂的に入隊し，兵士とともに戦争に参加し，独立獲得のための戦いで危険を兵士と共有したことを思い出します．政治闘争が中断されたか，あるいは不当で破壊的な政治闘争が続いたのか，彼らは，振り返りはしませんでした．」[46]

このように，ラホヴァリ将軍は，独立戦争時の「保守党の記憶」や「独立戦争は超党派的行動」ということを述べることで，「独立戦争の記憶」の中の，「自由党の記憶」を薄めようとしたのであった．つまり，「自由党による記憶の独占」に対する牽制が試みられた．しかし，ラホヴァリ将軍が人物名や戦争における重要な場面にも言及していないため，その発言は具体性に欠け，抽象的なものになっていた．そのことを意識してか，ラホヴァリ将軍は，演説の後半では，「独立戦争の記憶」ではなく，フェレキデ法案によって建てられる記念碑の造形に関する，以下のような提案をおこなった．

「この記念碑は平凡なものになるべきではなく，そして寓意像で構成されうるべきではありません．この記念碑は，モチーフとして，戦争で軍隊を指揮した君主の騎馬像であるべきです．まわりには，リ

45） *D. A. D.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, p.44.
46） *D. S.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 2 decembrie 1902, p.54.

レーフが兵士や戦争のエピソードを想起させるのです！」[47]

ラホヴァリ将軍が，記念碑の造形としてカロル 1 世の騎馬像をなぜ提案したのか．その本心は，もちろん，わからない．しかし，「独立戦争の記憶」の中の「カロル 1 世の記憶」を濃くすることで，「自由党の記憶」を薄めようとしたとも考えられる．あるいは，フェレキデ法案の議論の中で，記念碑の造形に関して具体的な提案を示すことで，ある意味，ラホヴァリ将軍と保守党の存在をアピールしようとしたともみえる．いずれにせよ，この提案自体が「自由党による記憶の独占」に対する牽制と解釈することもできるであろう．しかしながら，このラホヴァリ将軍の提案は，首相ストゥルザの「独立記念碑の造形は芸術家のインスピレーションに委ねる」という発言[48]によって一蹴されてしまう．

一方，マヌ将軍はその演説の中で，具体的な人物と場面を取り上げながら，独立戦争の記憶を想起した．

「両院の独立宣言に参加した保守党の唯一の代表はアレクサンドル・ラホヴァリ（Alexandru N. Lahovari）[49]であったことを思い出します．そのとき，自由党が多数派の議会において，彼は少数派でした．その際，彼は，独立宣言に投じる最も美しい石が，この偉大な国民的行為に対する国民代表の全会一致であると宣言したのです．そして，保守党の名の下に，独立宣言に賛成することを宣言したのです．」[50]

このように，マヌ将軍は，アレクサンドル･ラホヴァリの行動を想起することで，独立戦争において，自由党だけではなく，保守党も活躍したと主張したのであった．そして，国民の団結のイメージを語ることで，「独立戦争の記憶」の中にある「自由党の記憶」を希釈しようとしたのである．つまり，「自由党による記憶の独占」への牽制であった．しかし，この記憶の中では，奇しくも，マヌ将軍自身の言葉から，保守党の印象が薄いことがわかる．というのも，独立戦争時に保守党が議会の少数派であったことが，独立戦争における「端役」のようにみえるからである．逆に言えば，独立戦争の「主役」は自由党であったことを認めているともいえる．そして，そもそもこの「保守党の記憶」自体が，記憶をめぐる戦いにおいて「弱い」のである．というのも，独立戦争時において，保守党はまだ正式に存在していなかったからである．保守党は，公式的には，1880 年に組織化し，独立戦争期には，まだ保守諸派の状態であった．つまり，「保守党の記憶」は，「独立戦争の記憶」に含まれにくいのである．

以上のように，両院の保守党議員たちによる，「自由党による記憶の独占」に対する牽制は成功しなかった．つまり，保守党は「独立戦争の記憶」をめぐる戦いで，「負けた」ともいえるのである．ヴラデスクは直接的に批判することはできず，ラホヴァリ将軍による記念碑の造形に関する提案は事実上無視され，そしてマヌ将軍の記憶は「弱い」ものであった．そして，このことは，独立戦争の当事者として語ったラホヴァリ将軍とマヌ将軍の演説に対して，議場からの拍手がほとんどなかったことからもうかがえ

47）*Ibid*., pp.54-55.
48）*Ibid*., pp.54-55.
49）ラホヴァリ兄弟の長男で，ラホヴァリ将軍の兄である．ちなみに，ラホヴァリ将軍は三男であった．
50）*D. S*., sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 2 decembrie 1902, p.55.

る．フェレキデら３名の自由党議員に対しては，その演説の最中にも，拍手が何度もあったことを考えると，対照的である．もちろん，議場のほとんどの議員が自由党員であり，政敵たる保守党の議員に拍手を送るのは，不自然のようにみえるかもしれない．しかし，「自由党による記憶の独占」に対する牽制とはいえ，ラホヴァリ将軍たちが語っていたのは，「自由党と保守党（正確に言えば保守諸派）が団結をして独立戦争を勝ち抜いた」という，国民の団結のストーリーであった．しかし，この国民の団結の語りに聴衆である自由党員たちが共感を示していないのである．これは，「独立戦争の記憶」の中の「自由党の記憶」の濃度が非常に高かったことがうかがえる．この点については，ラホヴァリ将軍とマヌ将軍もおそらく認識していたと思われる．というのも，二人は独立戦争に従軍したにも拘わらず，その自らの体験を具体的に述べていないからである．

3.「独立戦争の記憶」を顕彰する記念碑

記念碑の建立計画が進む中で，表面的には，自由党と保守党とのバランスが図られた．例えば，1903年11月に，10名からなる記念碑建立委員会が設置されたが[51]，その委員長には王太子フェルディナンドが就任し，自由党と保守党からそれぞれ4名がこの委員会に参加した（表2参照）．両党から参加したこの8名は，現役議員かつ大臣経験者などといった基準で選ばれている．また，両政党からの参加者4名のうち，1名だけが独立戦争時の軍務経験者（ブディシュテアヌ将軍とマヌ将軍）であったという点にも，両党のバランスが図られたことがうかがえる．しかし，記念碑建立委員会に加わった自由党の4名（アウレリアン，ブディシュテアヌ将軍，フェレキデ，ストゥルザ）は，フェレキデ法案において，積極的に発言した者たちであった．他方，保守党の4名のうち，フェレキデ法案に関して発言した人物は，マヌ将軍だけであった．そして，マヌ将軍に関しても，上述したように，「独立戦争の記憶」をめぐる「戦い」において，自由党の上院議員に後れを取っていた．つまり，両院におけるフェレキデ法案の議論に鑑みれば，この記念碑建立においても，自由党が主導権を握っていくのは明らかであろう．

	委員	肩書（1903年現在）	党派	生没年	年齢（1903年現在）
1	フェルディナンド	王位継承者		1865年8月～1927年7月	38歳
2	N.ハララムビエ将軍	元陸軍大臣、元旅団将軍、元上院議員		1831年8月～1908年4月	71歳
3	D.A.ストゥルザ	首相、上院議員	自由党	1833年3月～1914年10月	70歳
4	P.S.アウレリアン	元首相、上院議員	自由党	1833年12月～1909年1月	68歳
5	C.ブディシュテアヌ将軍	元陸軍大臣、元師団将軍、上院議員	自由党	1838年9月～1911年11月	65歳
6	M.フェレキデ	元大臣、下院議員	自由党	1842年11月～1926年1月	61歳
7	G.カンタクジノ	元首相、上院議員	保守党	1832年9月～1913年3月	71歳
8	T.ロセッティ	元首相、上院議員	保守党	1837年5月～1923年7月	66歳
9	G.マヌ将軍	元首相、元旅団将軍、上院議員	保守党	1933年7月～1911年5月	70歳
10	P.P.カルプ	元首相、下院議員	保守党	1837年6月～1919年6月	66歳

図２「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」建立委員会のメンバー[52]

51) Monumentul independenţei.compunerea comitetului, *Adevărul*, an. 16, nr. 5138, 17 noiembrie 1903, p.2.

52) この図２は，『真実』と『国民の意志』の以下の記事を突き合わせながら，作成した．Monumentul independenţei. compunerea comitetului, *Adevărul*, an. 16, nr. 5138, 17 noiembrie 1903, p.2; *Voinţa Naţională*, an. 20, nr. 5586, 16 noiembrie 1903, p.3. なお，生没年や年齢については，Stoica, op. cit. で補足した．

自らが主導権を握り，首都に独立記念碑を建てるというのは，ある意味，自由党の悲願でもあった．なぜなら，この提案はフェレキデ法案が初めてではなかったからである．1897 年 3 月 14 日に，下院において自由党員カジミル中佐（Emil Cazimir）が，42 名の議員とともに，首都に独立記念碑を建てる権限を当時の陸軍大臣に付与するという法案を発議した[53]．もちろん，このときの政権は自由党であり，その際の首相はアウレリアンであった．しかし，この提案は下院の分散会にまわされた後，理由は定かではないが[54]，本会議で可決されることはなかった．また，ボンツェアヌの研究によると，1902 年時点のルーマニアには，独立記念碑に類するものは 18 件あり[55]，独立記念碑は決して珍しいものではなかった．しかし，そのほとんどが退役兵の団体や非政府組織などによって地方に建立され[56]，首都ブカレストには，独立記念碑はまだ存在していなかった[57]．それゆえに，国家主導で首都に独立戦争の記念碑を建てる，ということには，非常に大きな意味があったのだ．

さて，本章を締めくくるにあたって，フェレキデ法案によって計画された記念碑に関して，もう 1 点ほど注意することがある．それは記念碑の造形に関することである．本稿は，「幻のカロル 1 世像」の来歴を検討することを目的の一つとしているため，「幻のカロル 1 世像」の発端とされるフェレキデ法案に検討してきた．しかし，フェレキデ法案の時点では，カロル 1 世の像を設置されることが決定されていたわけではない．そもそも，この記念碑の正式名称は「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」であり，名称の中に「カロル 1 世」の文字はない．そして，上述したように，記念碑自体の造形はこの時点において決定されていない．発言者の中には，「大理石に刻む」という発言からオベリスクを想定していたと思われるミシル[58]，あるいは具体的な造形は不明だが，ブロンズの利用を示唆しているグラディシュティアヌ[59]らがおり，各発言者がイメージする記念碑の造形は異なっていたように思われる．それゆえに，保守党のラホヴァリ将軍は記念碑としてカロル 1 世の騎馬像を提案したわけだが，この提案も首相ストゥルザによって否定されている[60]．

記念碑のデザインを芸術家に任せるとしたストゥルザの本心は不明だが，この 1902 年の時点において，フィレキデ法案によって建立される記念碑は，カロル 1 世の銅像ではなかったであろう．というのも，上述したように，独立記念碑の建立は，当時，珍しいものではなかったのだが，そのほとんどが，

53）*D. A. D.*, sesiunea ordinară prelungită 1896-1897, şedinţa de la 14 marţie 1897, p.681.

54）なお，カジミル中佐の法案が本会議で審議されなかったことの遠因として，発議された 12 日後の 3 月 26 日にアウレリアン政権が倒れたこと，そして 4 月 3 日に下院の会期が終了したことなどが考えられる．

55）Bonţeanu, op. cit., p.341.

56）*Ibid.*, p.344.

57）独立記念碑を提案する際に，カジミル中佐は「ルーマニアの首都ブカレストには，独立戦争の記念的事実を想起するものがないのです」と述べている．*D. A. D.*, sesiunea ordinară prelungită 1896-1897, şedinţa de la 14 marţie 1897, p.681. 一方，ボンツェアヌは 1877 年に「独立戦争における英雄たちの記念の十字架」が建立されたことを指摘しているが，それがどのようなものかは説明していない．Bonţeanu, op. cit., pp.341, 343.　いずれにせよ，1902 年の時点で，ブカレストには，衆目を集める独立記念碑はなかったように思われる．

58）*D. A. D.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 28 noiembrie 1902, p.48.

59）*D. S.*, sesiunea ordinară 1902-1903, şedinţa de la 2 decembrie 1902, p.54.

60）*Ibid.*, pp.54-55.

図 3 「プロイエシュチの猟兵の記念碑」の絵葉書 [63]

具体的な人物を模った銅像ではなく，オベリスクを中心とした記念碑であったからだ [61]．例えば，当時，最も有名な独立記念碑の一つであるプラホヴァ県の「プロイエシュチの猟兵の記念碑」は，オベリスクを中心としたものであった．オベリスクの頂上にブロンズの鷲が止まり，周囲に 4 人の猟兵の銅像が取り囲むといったデザインであった（図 3 参照）[62]．いずれにせよ,「軍隊の記憶」と「カロル 1 世の記憶」だけでなく,「自由党の記憶」を想起する「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」は「幻のカロル 1 世像」の端緒でありながらも，名称においても，そして造形にもいても「カロル 1 世の記憶」が前面に出されていなかったのである．それでは，なぜこの記念碑が「幻のカロル 1 世像」になったのか．その点に関しては，次章において 1906 年の両院に提示された法案とそれをめぐる議論を検討しながら，明らかにしていく．

Ⅳ．「幻のカロル 1 世像」

1．カロル 1 世即位 40 周年記念と大博覧会

前章で示したように，フェレキデ法案の記念碑が「幻のカロル 1 世像」へと変容する転機は，1906 年の両院の議会において発議されたある法案にあった．そこで，本章では，同法案とその議論を検討していくが，その検討の前に，二つの状況を確認しておく．一つ目は，この 1906 年において，ルーマニ

61） Bonţeanu, op. cit., p.344.
62） 「プロイエシュチの猟兵の記念碑」については，以下の論文を参照せよ．Adrian Stan, Inaugurare Monumentului Vânatorilor din Ploieşti, *Tara Bârsei*.serie noua, nr. 12, 2013, pp.378-384.
63） 著者所蔵.

アでは，様々なイベントが実施されたということである．おこなわれたイベントは，国王カロル 1 世の即位 40 周年記念，ローマ皇帝トラヤヌスによるダキア征服 1800 周年記念，ルーマニア王国誕生 25 周年記念，そしてルーマニア大博覧会などであった．状況の二つ目は，当該時期の政権与党が保守党であったということである．ストゥルザ政権は 1904 年 12 月 20 日に倒れ，同年 12 月 22 日に保守党のカンタクジノ（G. Gr. Cantacuzino）政権が誕生していた．また，議会においても，保守党が多数派で，自由党が少数派となった．1905 年 2 月の総選挙で，保守党は下院（議席数 183）で 168 議席，上院（議席数 112）で 98 議席を獲得していた．一方，自由党は，下院で 11 議席，上院で 10 議席であった[64]．つまり，1902 年の政治状況とは，まったく逆の状況になっていたのである．

1906 年の諸イベントで，カンタクジノ政権が特に力を入れたのが，即位 40 周年記念と大博覧会であった[65]．そして，この二つは独立したものでなく，むしろ，保守党はこの二つを結びつけ，実施したのであった．実は，40 周年記念祭は，1904 年 3 月の時点で，自由党も企画していた記念事業であった[66]．その意味で，40 周年記念は前政権から引き継いだ案件であったが，保守党政権はこれに大博覧会を接続することで，大規模な記念事業を計画していったのである．1905 年 4 月 30 日の下院で，農工商国土大臣ヨン・ラホヴァリ（Ion N. Lahovari）[67] は，「民族博覧会を開催すること以外で，来年の即位記念を祝うことはできません」と述べ，即位記念までに 1 年程度しかないことを理由に，下院において大博覧会に関する法案を緊急に発議した[68]．この法案の審議の際，ヨン・ラホヴァリは，発議の理由として，40 周年記念祭と大博覧会とを結びつけながら，以下のように，その意義を主張した．

「苦難と不幸の長い年月の後，私たちルーマニア民族が安定と進歩の道に決定的に入り，カロル公，―今日では，自由と独立のルーマニアの，親愛なる栄光に満ちた国王でありますが―カロル公の選出により世襲の立憲王政が打ちたてられ，来年の 1906 年で 40 年を迎えます…政府は，国民の感情と一致して，1906 年現在において，1866 年からの過去があらゆる形で示される民族博覧会を組織すること以外で，来年の記念祭を祝うことができないと確信いたしました．この博覧会に訪問した外国人たちは，私たちがもつ労働の力，そして人の一生程度の長さにおいて，あるいは民族の一生では一瞬でしかない期間において，私たちが獲得した結果の大きさをみて，驚嘆すると確信しております．」[69]

このような理由づけのもとで，40 周年記念祭と大博覧会の同時開催，そしてその予算として 160 万

64）　この総選挙の正確な結果は，下院で保守党が 183 議席，自由党が 11 議席，保守党分派が 4 議席であり，上院は保守党が 98 議席，自由党が 10 議席，保守党分派が 3 議席，そして無所属が 1 議席であった．なお，保守党分派は，カルプ（Petre P. Carp）など青年時代派の流れをくむグループであった．Mamina, ***Monarhia constituțională…***, pp.241-242.

65）　一方，トラヤヌスによるダキア征服 1800 周年記念に対しては，カンタクジノ政権は消極的であった．この点については，以下の拙稿を参照せよ．拙稿「「ルーマニア王国におけるトラヤヌス帝の「記憶」：トラヤヌス帝のダキア征服 1800 年記念祭を中心に」『史叢』99, 2018 年 , pp.40-26.

66）　***D. A. D.***, sesiunea ordinară prelungită 1903-1904, şedinţa de la 24 martie 1904, p.881.

67）　ラホヴァリ兄弟の次男で，前章で言及したラホヴァリ将軍の兄である．

68）　***D. A. D.,*** sesiunea ordinară prelungită 1904-1905, şedinţa de la 30 aprilie 1905, pp.648-649.

69）　***Ibid.***, pp.674-675.

レイが可決された[70]．ただし，大博覧会の予算は，その後，さらに追加されていった．大博覧会開会以前の1905年11月25日には，290万レイが追加され[71]，最終的には，その総支出は660万レイ以上[72]におよんだ．このような大博覧会に対して，自由党は，もちろん，様々な論点から批判を展開していった[73]．しかし，その批判には，彼らが苦慮していることがうかがえる．例えば，下院議員ギツェレスク（G. G. Ghiţescu）は，1905年11月の追加予算の審議の際に，以下のように述べた．

「私たち自由党が，国王統治40年祭をより煌びやかな，そして壮大な祝祭にすることに反対していると理解されなくないのです．反対に，私たちは，可能な限り雄大な祝祭にすることに賛成です．しかし，先日，農工商国土大臣が私に返答したような，支出がどれほどになるかわからない博覧会ではなく，この重要な日の思い出を未来の世代に伝えるような記念碑を作ることの方が大きな利点があると考えているのです．」[74]

また，大博覧会開会直前[75]の1906年5月23日の段階で，自由党のヨネル・ブラティアヌ（Ion I. C. Brătianu）[76]も下院において，大博覧会が現在のルーマニアには不適当であると，以下のように述べた．

「カロル国王陛下の40年において，可能な限り，温かいやり方で，そして感謝の気持ちで，記念の年を祝いたいという感情が皆さんにあるのは，当然でしょう．ですので，私はその意図を議論したいのではなく，その感情の表し方に関してのみを論じたいのです．その方法の中でも，博覧会というのは，最も価値の少ないものの一つです．それは，第一に，私たちの現在の発展状態では，大博覧会は好都合なものではありません…外務大臣の時，万博への参加を招待してきた外国の代表の方に答えて，私たちは博覧会で自らを展示する段階に至っていないと述べたことがあります．」[77]

ギツェレスクは財政問題から切り込み，ヨネル・ブラティアヌは大博覧会を時期尚早としたが，両者にはある共通点がある．それは，ともに40周年記念祭に対しては賛意を示しながらも，大博覧会から40周年記念祭を切り離そうとしている点である．というのも，「カロル1世の記憶」と結びつく40周年記念祭そのものは否定や批判はできない一方で，「カロル1世の記憶」と本来関係のない大博覧会は，保守党政権の政策として，批判することができるからである．しかし，逆に言えば，40周年記念祭と大博覧会が結び付くことにより，保守党の政策と「カロル1世の記憶」とが結び付くのを，自由党は避けようとしていたと思われる[78]．もちろん，保守党はこのことを十分に理解していた．つまり，保守党は，

70） *Ibid.*, şedinţa de la 3 maiu 1905, pp.673-674.

71） *D. A. D.*, sesiunea ordinară, 1905-1906, şedinţa de la 25 noiembrie 1905, pp.19-20.

72） *Ibid.*, şedinţa de la 8 decembrie 1906, p.57.

73） 自由党は最終的に大博覧会の開会式をボイコットした．Andrei Florin Sora, Expoziţia jubiliară din 1906, ***Erasmus***, no. 12, 2001, p.182. なお，大博覧会をめぐる保守党と自由党との対立は，今後の研究課題にしたい．

74） *D. A. D*, sesiunea ordinară 1905-1906, şedinţa de la 28 noembrie 1905, p.36.

75） 大博覧会は，当初，5月14日に開会予定であったが，準備不足のため，開会予定が6月にずれ込んでいた．In chestia deschiderei expoziţia, ***Voinţa naţională***, an. 23, nr. 6295, 5 mai 1906, p.1.

76） 自由党初代党首ブラティアヌの息子である．なお，ブラティアヌとの混同を避けるために，本稿では，息子の方を通称名の「ヨネル・ブラティアヌ」と表記する．

77） *D. A. D*, sesiunea prelungită 1905-1906, şedinţa de la 23 maiu 1906, p.940.

78） 上院ではフェレキデが同じような発言をおこなっている．*D.S.*, sesiunea ordinară 1905-1906, şedinţa de la 20 decembrie 1905, p.159.

「カロル 1 世の記憶」を利用しながら，自らの政策を実現していったのである．そして，このような政治的戦術の一つとして，「幻のカロル 1 世像」も保守党によって提示されていくのであった．

2.「独立とカロル 1 世の独立記念碑」の発議

前節で示したように，カンタクジノ政権は，「カロル 1 世の記憶」を利用しながら，自らの政策を進めていたが，「幻のカロル 1 世像」も同じ論理の中で提示された．1906 年 5 月 11 日に即位 40 周年記念の式典がおこなわれ，そして大博覧会開会の準備が進められていく中で，記念碑建立に関する法案が臨時議会で発議された．法案を発議したのは，保守党に所属する下院議長トリアンダフィル（Gr. Triandafil）であった．5 月 16 日の下院の本会議において，トリアンダフィルは，議事進行を副議長に委ね，自らは記念碑建立のための追加予算に関する法案を発議した（以後，この法案をトリアンダフィル法案と表記）[79]．その後，トリアンダフィル法案は分散会の議論にまわされ，発議された同日中に本会議において全会一致で可決された．また，上院においても，司法大臣バダラウ（Al. Bădădrau）によって 5 月 18 日に提出され [80]，翌 19 日に代表委員会による若干の修正をともないながら，全会一致で可決された [81]．トリアンダフィル法案とフェレキデ法案と比較すると，両法案はともに当時の下院の議長によって発議されたという共通点をもつが，分散会を省略したフェレキデ法案と異なり，トリアンダフィル法案は分散会を経て可決された．そして，両法案の決定的な差異は，建立予定の記念碑の名称と記憶に対する強調点であった．

トリアンダフィル法案の内容は，「議会によってすでに可決された 50 万レイとともに，独立と国王カロル 1 世の記念碑をブカレストに建立する費用として，50 万レイの追加予算が与えられる」[82] というものであった．つまり，トリアンダフィル法案は，フィレキデ法案で可決された記念碑建立費用に，追加予算を提案するものだったのである．しかし，トリアンダフィル法案は，フィレキデ法の単なる追加物ではなかった．というのも，トリアンダフィル法案とフィレキデ法との間には，明確な差異があるからである．それは，記念碑の名称についてである．フィレキデ法によって建立が予定されていたのは，「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」であった．しかし，トリアンダフィル法案では，記念碑の名称が「独立と国王カロル 1 世の記念碑」となっていた．つまり，名称の中のから「戦争」と「軍」という文字が抜け，「国王カロル 1 世」という文字が新たに加わったのである．この名称変更が象徴的なように，トリアンダフィル法案について発言した保守党議員たちは，「カロル 1 世の記憶」だけを語り，「独立戦争の記憶」についてはほとんど語らなかった．例えば，トリアンダフィル自身は，発議の際に以下のように述べている．

「下院議員の皆さん，記念祭は終了しました．プレヴナの勝利者の前に傾けられた旗の震えから，勝

79）*D. A. D.*, sesiunea extraordinară 1906, şedinţa de la 16 maiu 1906, p.13.
80）*D. S.*, sesiunea extraordinară 1906, şedinţa de la 18 maiu 1906, p.17.
81）*Ibid.*, şedinţa de la 19 maiu 1906, pp.20-21. なお，修正は，追加予算の捻出について政府に一任するという事項が追加されたことであった．
82）*D. A. D.*, sesiunea extraordinară 1906, şedinţa de la 16 maiu 1906, p.13.

利に打ち震える退役兵の祝福から，未来の希望に酔いしれる若者たちの喜びの叫びから，熱狂した大衆の喝采から，私たちすべてにとって，今から40年前に選ばれた者[83]を称賛する声は明白であります…下院議員の皆様方，独立の獲得ほど，国にとって決定的な瞬間はありません…私たちの国の歴史は，独立のための長い戦いでした．ルーマニアの独立と強さのシンボルである鋼鉄の王冠をその額にのせるように，独立が国王カロル1世に与えられました．1866年に選ばれた者は，天命の使者のごとく現れたのです．その事実によって不滅の栄光の記念碑を国に打ち立てた者は，国家の配慮によって，子孫の目に栄光の光の中で現れるのに値します…政府の配慮によって，独立と国王カロル1世の記念碑をブカレストに建てることを提案いたします．」[84]

また，上院では，代表委員会報告者であるトチレスク（Gr. Tocilescu）は以下のように述べた．

「国王陛下の今日までの幸福で栄光ある40年と王国宣言から25年に対する，美しき忘れがたい記念祭は，国内外の全ルーマニア民族から，壮大で雄大な表明の機会を得ました... その頭にはミルチャ老公[85]とアレクサンドル善良公[86]の王冠をかぶり，その腰にはシュテファン大公[87]とミハイ勇敢公[88]の刀を差した瞬間から，現在の幸福な瞬間まで，彼[89]はその守護する場所に座し，そして常に座しております．彼は，ルーマニア王国の建国者であり，ルーマニア軍の総司令官であり，晴天，あるいは嵐のときの指導者であり，確固たる法の根底をその美徳から創出した立憲君主であり，最後に，未来を慰める希望の真実なる保証人であるのです．」[90]

以上のように，保守党は記念碑の名称を上書きし，さらに記念碑建立の理由についても，「自由党の記憶」が付随しやすい「独立戦争の記憶」にはほとんど言及せず，「カロル1世の記憶」を強調したり，あるいはカンタクジノ政権が進めていた即位40周年記念を想起させるような演説をおこなったりした．つまり，保守党は，建立予定であった記念碑における「カロル1世の記憶」の濃度を濃くすることで，「自由党の記憶」を薄めたのである．

これに対して，自由党の反応は鈍かった．自由党は議会において記念碑建立の追加予算に賛成票を投じていたが[91]，機関紙『国民の意志』において，記念碑建立の提案が，元来，自由党のものであったと主張するだけで，トリアンダフィル法案を直接的に批判することはなかった[92]．これは，記念碑の名称変更が気づかれなかったわけではない．例えば，左派系の新聞『真実』において，トリアンダフィル法

83） カロル1世を意味する．
84） *D. A. D.*, sesiunea extraordinară 1906, şedinţa de la 16 maiu 1906, p.13.
85） ミルチャ老公（Mircea cel Bătrân）は，14世紀末から15世紀初頭のワラキア公国の君主であった．
86） アレクサンドル善良公（Alexandru cel Bun）は，15世紀初頭のモルドヴァ公国の君主であった．
87） シュテファン大公（Ştefan cel Mare）は，15世紀後半から16世紀初頭のモルドヴァ公国の君主であった．
88） ミハイ勇敢公（Mihai Viteazul ）は，16世紀後半のワラキア公国の君主であり，また一時的ながらトランシルヴァニア侯国とモルドヴァ公国の君主にも即位した．
89） このトチレスクの発言に出てくる「彼」はすべてカロル1世を示す．
90） *D. S.*, sesiunea extraordinară 1906, şedinţa de la 19 maiu 1906, p.20.
91） *Ibid.*, p.20.
92） O reamintire, *Voința națională*, an. 23, nr. 6305 din 18 mai 1906, p.1.

案における記念碑の名称変更が指摘され[93]，さらに批判した論説が掲載されている[94]．しかしながら，この『真実』紙の批判も十分なものではなかった．確かに，同紙は，歴史というものが一人の偉人ではなく，大衆によってつくられるため，独立戦争における兵士たちの記憶を無視するべきではないと主張し，保守党による名称変更を批判した．しかし，ルーマニアの発展においてカロル 1 世が果たした役割については否定することができず，結論が曖昧なものとなっていた[95]．つまり，当該時期のルーマニアにおいて，「カロル 1 世の記憶」を真っ向から批判する，あるいは否定することは困難であり，それゆえに，「カロル 1 世の記憶」と結びついた「独立と国王カロル 1 世の記念碑」は受け入れざるを得ないものだったのである．

3.「幻のカロル 1 世像」と「クラヨヴァの独立記念碑」

1902 年にフィレキデ法案によってブカレストに建立されることが予定されていた「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」は，1906 年のトリアンダフィル法案によって，「独立と国王カロル 1 世の記念碑」という名称に変更された．これは，名称だけでなく，その造形にも及ぶものであった．前章でも述べたように，フィレキデ法案の段階では，記念碑の造形は未定であり，記念碑の構成の中にカロル 1 世像が加わるのも可能性も低かった．しかし，トリアンダフィル法案においては，名称に「カロル 1 世」という文字が加わったこともあり，カロル 1 世像の設置が想定されていたと思われる．例えば，トリアンダフィル法案の審議の際，下院において保守党のカンタクジノは，以下のような言葉で演説を締めくくっている．

「永久のブロンズによって，国王カロル 1 世の事実は，未来の世代にわたって，記憶されなければなりません．そして，永久の大理石の中に，君主の輝かしい記憶が刻まれなければならないのです．（激しい拍手，長い繰り返し）この提案は，ルーマニア人の心と深い感情に一致するのです．そして，政府は愛と感謝をもってこれを約束するでしょう．（熱狂的な拍手，大喝采）」[96]

この時，カンタクジノは政府首相であるばかりか，前章で言及した記念碑建立委員会のメンバーでもあった．保守党が記念碑建立において主導権を握る中で，ブロンズ像と大理石などで構成された記念碑を主張する彼の意見は，記念碑建立委員会で大きな影響力をもつであろう．また，世論も保守党が提示した記念碑をカロル 1 世の記念碑と認識していた．例えば，左派系の新聞『真実』では，この記念碑が「国王の記念碑」と称され[97]，また右派系の新聞『世界』では，この時点でまだ存在しないはずのカロル 1 世像が挿絵として登場していた[98]．そして，何よりも，この 1906 年という年が，カロル 1 世の即位 40 周年記念の年であった．国王に対する祝祭の雰囲気の中で，カロル 1 世像の提案は受け入れやすかった

93) *Adevărul*, 18, nr. 6015, 19 maiu 1906, p.2.
94) Monumentul regelui, *Adevărul*, an. 18, nr. 6016, 20 maiu 1906, p.1.
95) *Ibid*.
96) *D. A. D.*, sesiunea extraordinară 1906, şedinţa de la 16 maiu 1906, p.13.
97) Monumentul regelui, *Adevărul,* an. 18, nr. 6016, 20 maiu 1906, p.1.
98) Darul ofiţerilor de cavaleric pentru M. S. Regele, *Universul,* an. 24, no. 138, 23 maiu 1906, p.1.

と思われる．つまり，本稿が冒頭で述べた「幻のカロル 1 世像」とは，このトリアンダフィル法案によって提示された「独立と国王カロル 1 世の記念碑」であったのである．この計画が進めば，ブカレストにカロル 1 世像をともなう記念碑が建立されたかもしれない．しかし，残念ながら，この記念碑が建立されたという記録は存在していない．

さて，「幻のカロル 1 世像」，つまり「独立と国王カロル 1 世の記念碑」は，1906 年以降，どのような経緯を辿っていったのであろうか．19010 年の段階では，ブカレストにおいて「カロル 1 世を称える独立の記念碑」の建立予定が，まだ世論の中で認識されていた[99]．しかし，管見の限りでは，その後を辿ることができなかった．ブカレストにおいて初めて建立されたカロル 1 世の銅像は，カロル 1 世の騎馬像（除幕式 1939 年）であり，これは本稿が検討してきた「幻のカロル 1 世像」とは別の計画によるものであった．

それでは，なぜ「幻のカロル 1 世像」は建立されなかったのか．史料が不足しているため，この疑問に明確な解答を提示することができない．ただし，幻に終わった状況については，ある程度説明することができる．まず，記念碑建立の主導権を握った保守党政権が 1907 年 2 月末に勃発した農民反乱[100]によって，3 月 12 日に倒れ，一方政権を回復した自由党は，内部対立を孕みながらも，1910 年 12 月まで政権を維持した．つまり，農民反乱や政権交代という政局の中で，記念碑建立はうやむやになった可能性がある．そして，前章で示した記念碑建立委員会のメンバーが 1911 年までに 4 名死亡している（図 2 参照）．管見の限りでは，この欠員に対して委員を補充したという記録はない．つまり，形式的なものであったとはいえ，両党のバランスを意図した委員会構成が崩れてしまったのだ．このように，政局と委員の相次ぐ死亡により，「独立と国王カロル 1 世の記念碑」は幻に終わったと考えられる．

ただし，一つ留意点がある．それは，本論の冒頭で言及した「クラヨヴァの独立記念碑」（図 4 参照）のことである．この記念碑は南西の地方都市クラヨヴァに建立されたもので，その除幕式は 1913 年 5 月 21 日であった[101]．この記念碑の構成は，中央にカロル 1 世像があり，周りには二人の将校と四人の砲兵の銅像がおかれた．また，カロル 1 世像の台座には，議会で独立宣言が読みあげられる様子や激しい戦場などの様子を描いたレリーフが設置された．そして，この記念碑全体は，独立戦争の重要な場面であるカラファト[102]からの砲撃をあらわしたものであった[103]．つまり，この「クラヨヴァの独立記念碑」の構成やコンセプトは，「独立と国王カロル 1 世の記念碑」を連想させるものなのである．そのため，前述したように，この「クラヨヴァの独立記念碑」と「幻のカロル 1 世像」を同一と誤認している研究

99） O Scrisoare către regele Carol, ***Adevărul***, an. 23, nr. 7551, 15 septembrie 1910, p.1.

100） この 1907 年の農民反乱については，以下の拙稿を参照せよ．拙稿「20 世紀転換期ルーマニアにおける農民反乱（1907 年）―反乱初期のボトシャニ県を中心に」『桜門論叢』，2018 年, pp.125-147.

101） 記念碑の除幕式に王妃と王太子など王族が参加し，当時のクラヨヴァにおいては一大イベントとなった．その様子は地方紙において大々的に報じられた．***Curierul olteniei***, an. 23, no. 890, mai 1913, pp.1-3; ***Ibid***, no. 891, 3 iunie 1913, pp.1-3. なお，カロル 1 世自身は病気のために欠席した．Bercea-Florea, op. cit., p.51.

102） ドナウ川沿岸にある都市で，1877 年 5 月 21 日に対岸にある都市ヴィディンからオスマン帝国軍によって砲撃された．ルーマニアはその反撃としてカラファトからヴィディンを砲撃した．なお，このカラファトがあるドルジュ県の県都がクラヨヴァである．

103） Bercea-Florea, op. cit., pp.37-38.

図 4 「クラヨヴァの独立記念碑」の絵葉書 [109]

者もいる [104]．しかし，この二つの記念碑には，多くの相違点がみられた．まず，記念碑建立委員会のメンバーが一致していない．「クラヨヴァの独立記念碑」の建立委員会はクラヨヴァ出身の軍人や地方名士が中心となって構成され [105]，「独立と国王カロル 1 世の記念碑」の建立委員会のメンバーは誰一人参加していない．次に，建立費用の出所が異なっていた．これまで論じたように，「幻のカロル 1 世像」には国家予算があてられたが，「クラヨヴァの独立記念碑」は主に寄付によって建立された [106]．確かに，政府も「クラヨヴァの独立記念碑」に補助金を出してはいるが，その金額は 5,000 レイであった [107]．そして，なによりも建立場所が異なった．上述したように，「幻のカロル 1 世像」は首都ブカレストに建立されることに意義があったのだが，「クラヨヴァの独立記念碑」はクラヨヴァという地方都市で建立されたのであった．このように，この二つの記念碑は全く異なっていたのである [108]．

104） Tănăsoiu, op. cit., p.58; Bonţeanu, op. cit., p. 345.

105） 委員長にはジグルトゥ将軍が就任した．Monumentul pentru independenţă, ***Adevărul***, an. 21, nr. 7204, 25 septembrie 1909, p.3; Bercea-Florea, op. cit., pp.15-16. なお，委員会のメンバーの経歴については，以下のドルジュ県の県図書館のウェブサイトにあるデーターベースを利用した．http://aman.ro/?s=guran+nae（閲覧日 2021 年 6 月 3 日）

106） Bercea-Florea, op. cit., pp.21-22.

107） 1912-1913 年の陸軍省の予算として 5,000 レイが計上された．***D.A.D.***, sesiunea ordină prelungită 1911-1912, şedinţa de la 10 martie 1912, p.1277.

108） とはいえ，この二つの記念碑には，奇妙なつながりがある．まず，「クラヨヴァの独立記念碑」に補助金を出したのが保守党政権であり，主要な閣僚は記念碑の除幕式に参加していた．***Curierul olteniei***, an. 23, no. 890, mai 1913, p.1. また，記念碑建立委員長のジグルトゥ将軍は保守党に属していた．そして，記念碑を構成する二人の将校のブロンズ像のうちの一つが，ラホヴァリ将軍の像であった．フェレキデ法案の際に，ラホヴァリ将軍がカロル 1 世像の設置を要求していたことを想起すると，奇妙な偶然ともいえる．

109） 著者所蔵．

V．むすびにかえて

本稿は，「幻のカロル 1 世像」の来歴を追いながら，20 世紀初頭のルーマニアにおける二大政党政治と記憶の政治利用について検討してきた．本稿の目的の 1 つ目である「幻のカロル 1 世像」の来歴に関しては，その発端と変容について明らかにすることができた．1902 年のフェレキデ法案によって提案された「幻のカロル 1 世像」は，当初，「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」という名称で，さらにカロル 1 世像の設置については未定であった．しかし，1906 年のトリアンダフィル法案の段階において，その名称が「独立と国王カロル 1 世の記念碑」に変えられ，カロル 1 世像の設置の方向へと向かっていくのであった．ただし，1906 年以降，この「幻のカロル 1 世像」がなぜ頓挫したかについては，史料の制約上，明確な解答を提示することはできなかった．

本稿の目的の二つ目である二大政党政治における記憶の政治利用については，自由党と保守党が自らの政策を有利に進めるために記憶に訴えながら，法案を発議していく様子を明らかにした．自由党は独立戦争などルーマニアの歴史の転換期において重要な役割を担っていた．そのため，「自由党の記憶」は「独立戦争の記憶」に内包されることとなり，自由党はこの記憶の構造を最大限に利用していた．1902 年のフェレキデ法案によって発議された「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」の建立は，その典型例といえるだろう．一方，「独立戦争の記憶」と結びつき難い保守党は，「カロル 1 世の記憶」を政治利用していった．1906 年に在位 40 年を迎えた国王カロル 1 世を祝祭するという口実で，保守党は，本来，「カロル 1 世の記憶」とは関連性のない大博覧会などをカロル 1 世即位 40 周年記念と結びつけ，大規模な記念祝祭を計画した．こうしたお祭りムードの中で，保守党は「独立戦争記念と軍栄誉の記念碑」の名称を「独立と国王カロル 1 世の記念碑」に変更した．これにより，フェレキデ法案によって建立予定であった記念碑に内包された「自由党の記憶」は薄められたのである．

さて，「幻のカロル 1 世像」の頓挫と両党による記憶の政治利用を踏まえて，一つの結論を出すならば，自由党と保守党にとって，記念碑の建立は，本質的に重要な事項ではなかったのではないかと思われる．「独立戦争の記憶」に基づく記念碑であれ，あるいは「カロル 1 世の記憶」に基づく記念碑であれ，ナショナリズム的な観点から考えると，どちらも重要な記念碑であったはずである．しかしながら，両党はこの重要な記念碑を積極的に建立しようとはしなかった．例えば，フィレキデ法案が可決した 1902 年からトリアンダフィル法案が可決した 1906 年までの間で，公式に決められたことは，記念碑建立委員会だけであり，設置場所や記念の造形などが全く決められていなかった．つまり，自由党と保守党は自らの政策を有利に進めるために，そして自らの権勢を高めるために，記念碑建立を発議したといえるのである．

以上のように，本稿では，「記憶」という切り口で，20 世紀初頭ルーマニアの二大政党政治を分析することで，政治対立の構造の一端を明らかにすることができたが，今後の研究課題として二つのことを提示しておく．一つ目は，「幻のカロル 1 世像」の顛末である．現段階では，史料の制約から，十分に

明らかにすることができなかった．そのために，文書館史料や今回利用できなかった新聞・雑誌などを蒐集し，その一端を掴みたい．また，「幻のカロル 1 世像」とは直接的に関係はないが，同時期に生じた「クザ像」の建立をめぐる問題が一つのヒントを与えてくれるかもしれない．クザはモルドヴァ・ワラキア合同公国（ルーマニアの前身）の君主であった人物で，カロル 1 世は，このクザを追い出す形で，君主に即位したのである．ただし，クザはモルドヴァとワラキアの合同を象徴する人物でもあったため，20 世紀初頭にクザの銅像を建立する機運が高まった．この動きが活性化する時期と，「幻のカロル 1 世像」が語られなくなる時期がほぼ重なる．このことから，「君主」の銅像を建てることをめぐり，何らかの軋轢や駆け引きがあったと思われる．

今後の研究課題の二つ目は，記憶の政治利用についてである．本稿では，「幻のカロル 1 世像」をめぐる記憶の政治闘争を検討したが，記憶の政治利用という切り口は，20 世紀初頭の二大政党政治の様々な局面を明らかにすることが可能と考えている．例えば，1914 年に自由党が発議した憲法修正をめぐる議論においては，修正賛成者と修正反対者が憲法制定時の記憶を引き合いに出しながら，論争をおこなっていた．憲法修正をめぐる議論では，本来，憲法と現状との齟齬が問題となる．しかし，過去の記憶を想起しながら，議論を進めるという背景には，一定の政治的駆け引きや政治的な戦術があるのではないだろうか．いずれにせよ，「記憶」というものが，政治の場で，都合の良い形で使用され，そしてその否定できない雰囲気の中で政策が実施していく過程を，今後も検討していきたい．